

住井すゑとその文学の里(二十五)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

武者小路実篤と犬田卯・住井すゑ夫妻

『この道より我を生かす道なし
この道を歩く』という武者小路実篤の言葉が埼玉県入間郡毛呂山町の理想郷『新しき村』の門の木柱に書かれている。新しき村を建設したのは武者小路実篤である。実篤が提唱し、自ら筆を執った『新しき村の精神』の第一条に、新しき村は『全世界の人間が天命を全うし、各個人の自我を完全に生長させ、相互の協力和調和に満ちた世界の建設を目指した共同体』とある。新しき村は、農業を中心とする共同体で、最初、大正7年(1918年)に九州の宮崎県児湯郡木城村に建設されたが、ダム建設のため水没することになり、昭和14年(1939年)に同地に移転した。

西家より出た公種で、公種は京都武者小路に屋敷を構えた。以来武者小路家の宗主は、代々、朝廷(天皇政務所)に天皇の歌道宗匠として仕えてきた。明治17年(1884年)の華族令と叙爵内規制定により、第10代目宗主実世に子爵が授けられ、実篤はその二男であった。

実篤は、華族子弟が通う学習院の初・中・高等科を経て、明治39年(1906年)東京帝国大学文科大学社会学科(現東京大学文学部)に進学するが、1年後中退。この間、母方の叔父勘解由小路資承の勧めで聖書やロシアのトルストイの著作を読む。これより少し前の学習院高等科在学中、実篤は、親友の志賀直哉、木下利玄らと文学愛好グループを結成している。明治41年(1908年)の文集『荒野』は実篤の長い作家歴の最初の著作物となる。この著は自己犠牲を説くトルストイに影響を受け、『他人

を愛するにはまず己を愛さなければならぬ』という自己肯定論(エゴイズム)を述べたもので、実篤の思想の根底になっていた。3年後、実篤は志賀や学習院の後輩有島武郎とその弟里見弴らを加えて文芸月刊誌『白樺』を創刊した。その同人と月刊誌白樺は白樺派と呼ばれた。

実篤と犬田・住井夫妻には次のようなかわりがあった。実篤は、住井が2等に入賞した昭和3年(1928年)の読売新聞懸賞小説『大地にひらく』の選者であったこと。実篤と犬田は、昭和6年(1931年)に農本主義(農業および農村社会を国の本とする考え)者の同志として日本村治派同盟結成

に参加したことなどだ。
――筆者は、実篤の新しき村に共感して19歳で入村、そこで3年過ごした渡辺兼次郎という人を知っている。渡辺は、実篤に小窯を贈られたことがきっかけで、石岡市(旧八郷町)菖蒲沢の泰山窯で陶芸に精進している。渡辺の作風は、『白い釉に野の花を絵付(実篤が描いた花によく似ている)した、どこにもありそうでない、日常使って飽きのこない、親しめる器を、と日々制作している』そうだ。(敬称略)



↑絵巻をみる実篤(昭和40年代)

新しき村 根津与氏提供。

一毛呂山町歴史民族資料館刊

『武者小路実篤と新しき村』より引用―

→渡辺兼次郎の作品「野の花の器」―この野の花が武者小路実篤の描いた絵に似ている。

